

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	李小妹 【ジェンダー学際研究専攻 平成20年度生】	要 旨
論文題目	中国・深圳華僑城テーマパークにおける空間の表象と少数民族若者の日常実践	<p>本論文は、中国、深圳市の華僑城テーマパークを対象に、この空間がどのように生産され、何を表象しているかを論じるとともに、そこに働く少数民族の演者たちに焦点を当て、彼／女らの日常実践を描き出そうとした研究である。</p> <p>「はじめに」では、まず著者の深圳との関わりの経緯が語られ、それが研究の動機付けとなっていることが示される。</p> <p>第1章では、研究の理論的枠組みと先行研究——1) テーマパークをめぐる議論、2) 中国における「国家」、「民族」、「少数民族」の観念、3) 空間と場所をめぐる議論——が提示される。</p> <p>第2章では、香港に隣接するという立地条件を生かし、グローバル化する市場主義経済の拠点として創られた深圳という場所の開発過程と、華僑城テーマパークの開発過程の関連性が語られる。</p> <p>第3章では、華僑城テーマパークの開発過程が、中国における観光業の発展とともに示され、当時の主流だった工業開発の潮流に抗ってテーマパーク開発者となった馬志民の思想が、紹介される。</p> <p>第4章では、華僑城の3つのテーマパーク空間が、それぞれいかにモダニティ、ナショナリティ、エスニシティを表象しているかが語られる。世界の窓は、中国から見た「世界」であり、ミニチュアの建造物を通じて、世界とつながる近代的な中国像が示される。錦秋中華（「美しい中華」）は、中国という国家そのものの地図的表象であり、中国各地の名所旧跡がやはりミニチュアで示される。これに対し、民俗文化村は「真正性」を表現する少数民族の伝統住居や民具があり、少数民族の演者たちがリアリティを演出している。それは少数民族への（主体としての漢民族による）他者化を伴うまなざしによって、多民族中華国家像が描から得るに取り込まれる仕掛けであり、表象の政治性が顕著である。</p> <p>第5章では、こうした権力・資本によって作られた空間の中で生きている少数民族の若者たちの労働と身体がいかに管理されつつ、主体としての若者たちがそれに規定されつつも独自の日常実践を行っているかが語られる。</p> <p>第6章の結論では、これまでの知見に即して、空間と場所、ルフェーブの「空間の表象」「表象の空間」の枠組みが再検討され、両者が二項対立的なものではなく、可変的で流動的な性格を持つことが主張される。</p> <p>最後にフィールドワーカーの位置性が論じられ、フィールドワークは（女性）調査者に対し、調査対象（男性）が主体ともなる相互交渉の過程であり、調査する者／される者の二元論もまた自明のものではないと締めくくられる。</p>
審査委員	(主査) 熊谷圭知 教授	
	水野勲 教授	
	小林誠 教授	
	宮澤仁 准教授	
	宮尾正樹 教授	